二〇二二年度　入学試験問題

法学部A方式Ⅰ日程・文学部A方式Ⅱ日程・経営学部A方式Ⅱ日程

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

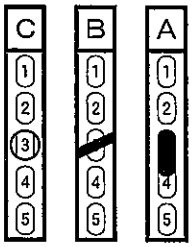
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例

(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

世界中どこの社会でも食物はみんなで分かち合うものと見なされているし、独り占めすることに強い非難の目が向けられる。人間は赤ん坊の頃から食物をもらい、食物をあげる行動を示す。誰に教えられるわけでもないのに、食物は他者との重要なコミュニケーションの手段となる。それは共食という行為が人間の行動に深く根を下ろしている証である。

人間は野生の食物でもめったにその場で食べることをしない。ぶどう狩りや潮干狩りのように、必ず自分の必要以上の食物を採集してそれを仲間のもとへ持って帰る。人間の採集活動には常に仲間の食欲が背景となっているのだ。しかも、採集することによって人間は食物の分布を変えることができる。一箇所では少ししか得られないものも、集めればみんなで分かち合って共食できるようになる。逆にある場所で豊富に得られる食物も、少ししか採らなければみんなの注目を集める結果となる。採集という操作を加えることによって、人間は野生の食物がもつ本来の分布や量を変え、それを分配することによって互いの社会関係を調整できるようになったのである。

それが①食事という社会交渉の発明だった。食事はもちろん食べるための行為だが、社会的な意味を多く含んでいる。食卓を用意し、席をしつらえ、客や食物に合わせた食器を並べ、贅（ぜい）を凝らした料理をつくる。しかも席の順番や服装、食事のマナーに至るまで、食べることには直接関係ない取り決めがある。食事をするための特別な部屋や建物があることにしても、食べることだけを考えればおかしなことだ。それは食事が共に食べるという行為を通じて、互いの社会的な関係を確認しあう一種の儀礼だからである。人間は親しい仲間だけでなく、見知らぬ人々を招待する際にも食卓を用意する。また、人を訪問する際には食物を携えていくのが礼儀となっている社会も多い。食物はいたるところで人々の出会いを和ませ、平和な関係を築くことにコウケン（あ）しているのである。

しかし、人間の文化に彩られた食事という行為も、もとをただせば誰かが食物を採集してきて仲間といっしょに共食をすることからはじまったのである。②仲間といっしょに食卓を囲むことは今の人間にとってはあたりまえの行為だが、これができる

霊長類は人間以外にいない。なぜなら、逆説的だが食事には食欲を抑制することが不可欠だからである。採集するとき、食物を持って帰るとき、仲間に分配するとき、共食するとき、人間は何度も自分の食欲を抑えなければならない。抑制することによって人々は仲間とともにいること、仲間と同調して生きていることを感得するのだろう。これは簡単なようで、サルにも類人猿にもなかなかできない高度な社会技術である。過去のある時代に、人間は食欲の抑制を仲間と共有することで食べるという行為を社会的なものにしたのだ。

人間に共食をもたらし、食事を発明させた原因は何だったのか。私は直立二足歩行という人間の奇妙な歩行様式にその秘密が隠されていると思う。

人間の進化は立って二足で歩くことからはじまったと考えられている。人間の祖先がチンパンジーとの共通祖先から分かれたのが今から六〇〇～七〇〇万年前で、この直後から人間が直立二足歩行をしていたという証拠が見つかっている。〔A〕しかし、脳が大きくなりはじめたのは二五〇万年前だから、人間の祖先たちは実に四〇〇万年もの長い間、類人猿並の小さな脳で、しかし二足で歩いて暮らしていたことになる。いったい人間の祖先はその時代に何をしていたのだろう。

人間の祖先が最初に登場したのは中新世の終わりで、地球規模の寒冷・乾燥気候が到来した時代だった。湖や川は干上がり、森林が縮小して草原が広がった。それまで豊かな熱帯雨林で暮らしていた霊長類は、森林に残るか、森林を出て新しい可能性を広げるかという選択を迫られた。〔B〕その結果、類人猿の祖先は森林に残り、人間の祖先は徐々に森林を出て開けたサバンナへと生活の場を広げたのである。その際、人間の祖先は他の霊長類にはない採食様式を発明した。それは、食物を採集する場所と食べる場所を分けるという方法だったと私は思う。

小さな森林が断片的に草原の中に散らばっている環境では、自分の食欲を満たすためにいくつかの森林を渡り歩かねばならない。草原には果実や昆虫など栄養価の高い食物がないので、森林の中よりも長い距離を歩く必要がある。〔C〕つまり、人間の祖先はまず、食物が広く分散している環境でエネルギー効率のよい歩行様式を発明したと考えられる。〔D〕

しかし、草原にはライオン、ハイエナ、ジャッカルなど危険な肉食獣が徘徊している。二足歩行は敏捷性や走力では四足歩

行に劣るので、とくに体の小さな子どもたちや老人は草原をのんきに歩くわけにはいかない。〔E〕そこで、人間の祖先はクッキョウな男たちが先に食物を見つけに行き、後から仲間たちが合流していっしょに食べることをはじめたに違いない。やがて自由になった手で食物を採集して安全な場所へ運び、それを仲間たちと共食するようになったのだろうと思う。採集活動によって、人間ははじめて食物の分布に影響されない社会性を手に入れることができたのである。〔F〕つまり、エネルギー効率を良くするための歩行様式の改善が、採集と共食という新しい採食活動を生み出し、食物を社会的に利用する人間性を発達させるきっかけとなったのである。

だから、人間の食事には③長い人間の進化の歴史が濃縮されている。食事をするために必要な抑制と同調は、私たちの祖先が高い知能をもつ前に獲得した人間の社会性の原点ともいうべきものだ。ところが、現代の人々は食べるという行為の中に本来埋め込まれているはずの社会性をだんだん失いつつある。それは、人々が食べるという行為にあまりにも効率を求めすぎた代償だと私は思う。古くから人間は食べることに過大な手間と時間をかけてきた。親しい仲間といっしょに食べる快楽、未知の仲間と食卓を囲む喜びと興奮は、人間だけが持っている貴重な進化の遺産である。④食事という社会的行為が消滅したとき、人間の社会性も危機に直面する。多様な文化や民族がコウサクしあう現代、私たちは食卓を利用してさらに新しい社会性を手に入れられる時代を迎えている。二一世紀は新しい食の構築の時代だと私は思う。

（山極寿一「食卓の進化論」より）

問一　傍線部①「食事という社会交渉の発明」とは、具体的にどういう内容を指しているか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人間の採集活動は、食欲をもつ仲間の社会的な要請によって行われ、次いで食物を分配する交渉の場である共食という習慣を生み出したということ。

イ　人間の食事は、食物の量やそれを採る場所を適切に調整し、必要なときに必要な仲間に食物を分配する社会的な機能を担うものとして成立したということ。

ウ　生まれたばかりの人間は自力で食物を採集することができないので、食物をもらう交渉をして初めて社会的に生きられるようになるということ。

エ　人間は幼いころから食物をあげたりもらったりすることをくり返し、食事の場で適切に食物を分かちあえるようになったときに社会的存在になるということ。

オ　人間の食事は、食卓を整える儀礼にはじまり、食事中のマナーや招待されたときの礼儀など様々な社会的な取り決めを発明することで育まれたということ。

問二　傍線部②「仲間といっしょに食卓を囲むことは今の人間にとってはあたりまえの行為だが、これができる霊長類は人間以外にいない」と言えるのはなぜか。その理由として適切なものをつぎの中からすべて選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人間以外の霊長類には、食物の採集から仲間との食事にいたる様々な段階で自分の食欲を抑制するという行為ができないから。

イ　世界中の社会でその行為が確認され、また赤ん坊のころからそうできるように、食物を共有することは人間だけの本能だと考えられるから。

ウ　直立二足歩行をせず両手も使えない霊長類は、食卓を囲むことに不可欠な多様な儀礼を生み出すことができなかったから。

エ　人間は食欲を抑制することで他の霊長類と分化したので、仲間と食物を分かちあう習慣なしには種として生き延びられなかったから。

オ　直立二足歩行をした人間だけが、食物を採集する場所と食欲を満たす場所を区別して共食という営みを手に入れることができたから。

問三　つぎの一文は、本文中の〔A〕〜〔F〕のいずれかの箇所に入る。最も適切な箇所を選び、解答欄の記号をマークせよ。

直立二足歩行は四足歩行に比べて、長い距離をゆっくり歩くときにエネルギー効率がいいと言われている。

問四　傍線部③「長い人間の進化の歴史」とあるが、筆者が考える「人間の進化」について説明したものとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人間の進化とは食事の進化であり、食物を採集して適切に調理する方法や食卓を整えて仲間と一緒に食べる儀礼が複雑になるほど、その社会の人間性は高いものと見なされる。

イ　人間の進化はすべて広く食物が分布する草原で効率よく暮らすためにはじまったものであり、そこから直立二足歩行と共食が生まれ、現在ではその食事から社会性を失わせるにいたっている。

ウ　人間の進化とは人間が社会性を手に入れる過程であり、直立二足歩行によって採集と食事の場所を区別し共食が可能になることで、人間は他の霊長類にはない社会性を獲得した。

エ　人間の進化は直立二足歩行からはじまっており、豊かな森林地帯を歩きまわって食物を採集しながら食欲を抑制する能力を獲得した結果、食事を中心とする多様な文化が生まれた。

オ　人間の進化とはその社会性の進歩であり、かつてエネルギー効率を高める歩行様式が社会的な採食様式を可能にしたように、今後も社会性を高める効率的な行動様式が新たに生まれることが期待される。

問五　傍線部④「食事という社会的行為が消滅したとき、人間の社会性も危機に直面する」とあるが、それはなぜか。本文全体の内容を踏まえ、その理由を三十字以上四十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問六　二重傍線部あ～うのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

1 〈母語〉とは人が生まれ育ったことばである。ことばに即した自らの思考や感情を律するのは、基本的にこの母語である。母語は概ね一〇代前半までに形成され、一〇代終わり以降になると、もう母語が取り替わることはまずない。英語では mother tongue という。言語習得論などでは first language などと呼んでいる。母語以外の、後に学んだ言語は、多かれ少なかれ母語の影響を受けることが知られている。

2 成人にとっての母語は取り替えのきかない言語であるが、幼いときの母語は、就学年齢ほどまでであれば取り替わることがいくらでもありうる。九州博多で生まれ、小学校一年までは博多のことばが母語であったのに、小学校二年から横浜で育つと横浜のことばになってしまう、そうしたことはごく自然なことである。場合によっては方言ではなく、日本語が朝鮮語に、朝鮮語が日本語にといった変容を見せることもあるし、単一言語話者が二言語を母語とする話者として育つといったことも、地球上ではいくらでも起こっている。こうした点では、①first language をこれだと言い切れない話者も、存在しうるわけである。

3 〈母語〉と「母国語」は異なった概念である。母国語は一般には自らが所属する「国」の言語を指す。在日朝鮮人であれば、母国語は朝鮮語、母語は人によって朝鮮語だったり、日本語だったり、場合によってはその双方だったりということになる。

4 所属する「国」の言語といったが、実はこの「母国語」という概念は「国語」という概念と同じくらい危うい概念である。日本の「国語」が日本語であると言った瞬間に、例えばアイヌ語は排除されてしまう。「国語」という概念装置をめぐっては、既にいくつかの書物で重要な議論がなされているので、ここでは繰り返さない。ちなみに一九四四年に設立された日本の国語学会が日本語学会と名称を改めたのは、二〇〇四年のことである。

5 「外国語」という概念も危うい概念である。②日本語を母語とする在日朝鮮人・在日韓国人、つまり在日の「外国人」国籍の人々にとっては、朝鮮語は「外国語」とはいえまい。むしろ日本語の方が「外国語」ということになる。一般には母語でない言語、つまり非母語を外国語と呼ぶことが多いが、これは避けた方がよい。実際には非母語の教育、非母語の学習であるのに、外国語

教育とか、外国語学習と呼ぶのでは、正確さの点でも、理念の点でも問題があろう。日本語母語話者を対象にした朝鮮語教育が「外国語教育」と呼ばれた瞬間に、学習者から在日朝鮮人・韓国人が排除される構図ができあがってしまう。「外国語教育」ということばは、そこで排除される構図を強いられる人々の悲しみに、気づかない。

6 日本語教育の専門家でも、正確には「日本語母語話者はこうこうである」と言うべきところを、「日本人はこうこうである」などとしばしば言っている。韓国における、非母語話者を対象にした韓国語教育の現場においても同様である。これらは改めるべき慣習である。言語教育の場面で、「日本人」とか「韓国人」などといった概念が本当に必要になることは、ごく限られた場合しかないと思ってよい。言語を教え、学ぶ場面で、「日本人」や「韓国人」と言っていることの多くは、「日本語母語話者」や「朝鮮語母語話者」を指していることがほとんどである。

7 整理しよう。原理はこうである。③言語と民族と国家、これらは必ずしも対応するものではない。むしろ対応しないことが、地球上の原理的なありかたである。いわゆる「単一民族国家」としばしば誤解される日本や朝鮮半島では、こうした原理的なありかたが見えにくくなっている。言語＝国家という等式に疑義をはさむ人々も、言語＝民族という等式にはしばしば寛容になってしまう。言語＝民族＝国家という等式がたまたま崩れて現在があるのではない。むしろそれら三つの対応しないことが、より深いところに横たわる原理であり、default（デフォルト）即ち初期状態である。言語はすべからく個に属する。母と子さえ、言語は異なりうるのである。

8 言語＝民族＝国家という等式が常に成立するとは限らないことを見据えるなら、ことばの本質的なありようについても考えてみなければならない。ことばはコミュニケーションの道具だとか、意味を伝えるものだと言われる。もちろんここで言う「意味」とは〈ことばに即した意味〉であって、鐘が鳴るのは授業の始まりを「意味」するとか、人生や歴史の「意味」だとか、存在の「意味」などといったことを問題にしているわけではない。このように〈ことばに即した意味〉という限定をつけても、ことばが意味を伝える道具であり、ことばをコミュニケーションの道具と考えるのは、言語学でも言語教育でもほとんど疑われていない定説のごとくである。しかしながら、とりわけ複数言語使用のただ中では、あることばを発したからといって、それが通

じるとは限らないのである。

9 少女が掌を見つめて「ピ」と言った。それを少年が「雨」の意味だと理解するとは限らない。少女の言語と少年の言語は異なるかもしれない、ことばにとっては、これが全てに先立つ前提である。つまり発したことばは常に、意味として実現するとは限らない。ことばは意味となったり、ならなかったりするのである。そこではことばが予め意味を〈持って〉おり、それをやりとりするといった構図ではなく、ことばがそれぞれの人にあって意味と〈なる〉様相を呈する。会話は意味を持ったことばをやりとりする、キャッチボールのようなものではない。④ことばは意味を持たない、それは意味と〈なる〉のである。そして悲しいことに、ことばは意味と〈ならない〉こともある。

10 ユーラシアを見よう、人と人が交わり、部族と部族とが交わる地球上の大地に行われる言語のありようは、このように〈ことばは通じたり、通じなかったりする〉ことが、むしろdefaultであると言ってもよいほどである。［ X ］を考えれば、このことはすぐわかる。母と子、父と子さえ、それぞれの母語が異なった［ X ］であることなど、「単一言語国家」などと言われる日本でも、何ら珍しいことではない。ことばを考えるとき、あたかも実験室のごとくに、単一言語状態を想定しているとしたら、私たちは大きな誤りを犯しかねないのである。

（野間秀樹『ハングルの誕生　音（おん）から文字を創る』より。文章を一部改変した）

問一　傍線部①「first language をこれだと言い切れない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　一〇代前半までに単一言語話者から二言語を母語とする話者になったことによって、どちらの言語を先に習得したのか傍目にはわからない状態にあるということ。

イ　就学年齢までに母語が替わったり、複数の言語が母語になったりしたことによって、first language が何であったかを話者が忘却しているということ。

ウ　一定の年齢に達するまでの間に母語が変化したり、複数の言語が母語になったりしたことによって、どの言語が母語であるかを一つに特定することが困難だということ。

エ　後に学んだ言語が前に学んだ言語の影響を受けずに済んだといえるほど、複数の方言あるいは複数の言語を自在に操れる状態にあるということ。

オ　成人にとって言語は取り替えのきかないものであるものの、様々な要因により、成人後に新たな言語を身につけざるをえない環境にあるということ。

問二　傍線部②「日本語を母語とする在日朝鮮人・在日韓国人、つまり在日の「外国人」国籍の人々にとっては、朝鮮語は「外国語」とはいえまい」とあるが、その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　日本語を母語とする在日の「外国人」国籍の人々は、自分の所属する国の言語も使用できるのが普通だから。

イ　どのような国や地域に暮らしていても、「外国人」国籍を持つ人々が自分の居住する国や地域の言語を母語とすることは極めて難しいから。

ウ　日本語を母語とする在日の「外国人」国籍の人にとって、外国語の中でも母国の言語は思い入れのある存在だといえるから。

エ　日本語を母語としていたとしても、「外国人」国籍を持つ人にとって自分の所属する国の言語は「母国語」に該当するから。

オ　在日の「外国人」国籍の人々の中でも、日本語と自分の所属する国の言語の二つを母語とする人が多数存在するから。

問三　傍線部③「言語と民族と国家、これらは必ずしも対応するものではない」とあるが、言語が民族や国家と対応しない理由を二十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問四　傍線部④「ことばは意味を持たない、それは意味と〈なる〉のである」とあるが、それはどのようなことか。「こと」で結ぶかたちで三十字以上四十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問五　空欄 X に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　民族　　イ　文化　　ウ　国家　　エ　言語　　オ　方言

問六　右の文章は1から10までの十の形式段落から成り立っている。これを内容上、前半と後半に分けるとすると、後半はどの段落から始まると考えられるか。最も適切な段落番号を選び、解答欄の番号をマークせよ。

問七　右の文章で述べられていることと合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　二〇〇四年に日本の国語学会が日本語学会へと名称変更したことは、母国語という概念を相対化する風潮の中での先進的な取り組みの表れであった。

イ　日本語を母語とするのは日本人とは限らないという事実を日本語教育の専門家でさえ忘れがちなのは、望ましくない傾向である。

ウ　一つの民族は一つの言語を共有するという誤解の浸透は、日本や韓国のような単一民族国家に見られる特有の現象である。

エ　ことばはコミュニケーションの道具であるという理論は、言語＝民族という等式に対して寛容な理解を持つ人々によって導き出された。

オ　ことばが通じないことが常態となっている地域において、民族や部族間の相互理解が進んでいないことは悲しむべき現実である。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

南都に歯取る唐人ありき。ある在家人の慳貪にして、利簡を先とし、事にふれて商心のみありて、得もありけるが、虫の食ひたる歯を取らせんとて、唐人が許へ行きぬ。歯取るには、銭二文に定めたるを、「一文にて取りてたべ」と言ふ。小分の事なれば、ただも取るべけれども、心ざまの憎さに、「ふつと一文には取らじ」と言ふ。「さらば三文にて歯二つ取りてたべ」とて、虫も食はぬ、世によき歯を取りそへて、二つ取らせてけり。心には得利と思ひけめども、疵なき歯を失ひぬる、大きなる損なり。これは大きに愚かなる事、[A]しわざなり。但し世間の人の利益の心深きは、事にふれて利分を思ふ程に、因果の道理も知らず、当来[a]の苦果をもわきまへず、ただ眼前の利にふけりて、菩提の宝を失ひ、仏法の利を得ざる事のみこそ多けれ。上代は人心すなほに欲なくして、善根を営みしも、皆実しき心に住しき。

宇治殿[*]の平等院建立し、阿弥陀堂供養のありけるに、山僧になにがしの阿闍梨とかや、貴き聞こえあるを、御堂導師に請じ給へる[1]に、施主[*]分に、「この御堂造立の故に、地獄に落ちさせ[2]給はん事こそ、あさましく侍れ」としたりければ、聴聞の人々までも興さめて思ひけるに、御供養過ぎて、「いかが仕りて、この罪懺悔し候ふべき」と仰せられければ、「この御造立の間に、非分に人を煩はしめ給へるところを御得分の物にてつぐのひ返し給[1]ば、めでたく候ひなむ」と申しければ、悉く尋ね聞かせ給ひて、人夫までも暇[*]の分をぞたびける。かかる清浄の信心[b]ありて、造り置き給へる寺にて、今に至るまで焼けず損ぜず。

建仁寺の塔も、既に四度の炎上に免れたり。彼の寺の古き僧の語りしは、故梶原景時[*]打たれて後、彼の女房鹿野の尼公、あまりに嘆き悲しみて、すずろに世をも人をも恨み思ひ沈みてのみありけるを、建仁寺の僧正、常は教化せられけり。「何事も[B]果とて、我が作る業の報ひて、善悪の因たがはず、苦楽の果を受くる事なり。世をも人をも恨み給ふべからず。故大将殿[*]の御時、よろづの軍の謀をば仰せ合せ[3]しかば、人の亡び失せし事、然るべき事と言ひながら、彼の計らひによる。その咎逃れ難くして、つひに失せられしかば、人の咎と思ひ給ふべからず。ただ恨み嘆きやめて、一心後世菩提を弔ひ給へ」と

ぞ、よりより教化せられける。「何事の道理も覚へず。ただ口惜しとこそ思ひ給 [2] 」とて、嘆きけれども、常に諫め教へられける故に、やうやう事の道理を思ひほどきて、「げにも然るべき事なり。 [B] 果の謂はれもさる事なり。また世にあるには、事に触れて生死の業こそ多く積もるべきに、この嘆き故に自づから遁世の身の如くなりて、無常の身にあたりて、思ひ知らるる事も侍り。彼の菩提のために仏法をも営めば、今生は嘆くに似たれども、当来はたのもしくこそ侍れ。世にあらましかば、いよいよ罪こそ重なり侍るべけれ。この世の嘆きは、後世の悦びなるべしと思ひ給 [3] て、今は世をも人をも恨み給へじ。善知識の御恩こそ嬉しけれ」とて、我が身も持斎し、真言の行なんどする程に、信あれば外に徳あらはるる事にて、大きなる庄を三所給はりたりければ、僧正も落ち会ひて、「さればこそ申ししか。我が心清き時は、自づから感ある事なり」と申されければ、「故梶原大きなる者にて侍りしかば、罪も定めて大きなるらむ。如何なる善根をか営みて、彼の苦患をたすくべき」と申せば、「事善の中には、塔を立つるこそ最上の功徳なれ。当寺に塔を立て給へ」と僧正申されければ、三所の所領の我が得分の物にて、三年の中にくみ立てにけり。聊かも人の煩らひなかりけるとぞ。

（『沙石集』より）

【注】・＊宇治殿　藤原頼通のこと。
＊施主分　法会において施主の功徳を述べる部分。
＊暇の分　手間賃。
＊梶原景時　平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての武士。はじめ平家方として源頼朝と戦ったが、頼朝の危急を救ったために、後にその信任を受けた。しかし、反発する武士も多く、頼朝の没後、敗死。
＊大将殿　源頼朝のこと。

問一　傍線部1「る」2「させ」3「しか」4「るる」の文法上の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　尊敬　　イ　完了　　ウ　自発　　エ　使役　　オ　可能　　カ　過去

問二　空欄 1 2 3 に入る最も適切な活用語尾をつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　は　　イ　ひ　　ウ　ふ　　エ　ふる　　オ　ふれ　　カ　へ

問三　傍線部a「当来」と本文中で最も近い意味で使われている語をつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。なお、左記の選択肢の各語には、本文中にア～オの波線を付した。

ア　在家　　イ　供養　　ウ　後世　　エ　遁世　　オ　無常

問四　空欄 A に入る最も適切な語をつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　なやましき　　イ　をこがましき　　ウ　たけだけしき　　エ　うらめしき　　オ　おもしろき

問五　空欄 B には同じ語が入る。その語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　諸行無常　　イ　栄耀栄華　　ウ　会者定離　　エ　自業自得　　オ　極楽往生

問六　傍線部b「かかる清浄の信心」とは、誰が何をどのようにしたことを指すか。その内容が具体的にわかるように四十字以内で説明せよ。ただし、句読点も一字と数える。

問七　傍線部c「自づから感ある事なり」とあるが、この場合は何について述べたものか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　仏事を営んだこと　　イ　遁世の身となったこと　　ウ　建仁寺の僧正からよい教えを受けたこと

エ　大きな所領を得たこと　　オ　塔を立てたこと

問八　右の文章は鎌倉時代の仏教説話集『沙石集』の一節である。つぎの中から『沙石集』と同じく鎌倉時代に成立した作品を二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　日本霊異記　　イ　平家物語　　ウ　狭衣物語

エ　宇治拾遺物語　　オ　うつほ物語　　カ　雨月物語

〔四〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの四字熟語A～Cの空欄にあてはまる漢字を、それぞれ解答欄に記せ。

A 絶□絶命

B □然自若

C 巧言□色

問二 つぎのア～クの中から、問一の四字熟語A～Cの意味として最も適切なものをそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 落ちついていてものごとに動じないこと。

イ 天地が調和しておのずから美しいこと。

ウ 仕方ないものとして静かに死を受けいれること。

エ 弁舌さわやかで容貌うるわしいこと。

オ どうしようもない運命に翻弄されること。

カ 口先うまく愛想よく媚びへつらうこと。

キ 生命があやういほど困難な状態であること。

ク 大自然のようにおおらかで包容力があること。

問三 つぎのア～キの中から、芥川龍之介の作品名でないものを二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 山椒大夫　　イ 羅生門　　ウ 鼻　　エ 戯作三昧

オ 地獄変　　カ 田園の憂鬱　　キ 舞踏会